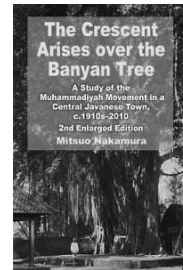


つとえる。

外国図書



Nakamura Mitsuo, *The Crescent Arises over the Banyan Tree: A Study of the Muhammadiyah Movement in a Central Javanese Town c. 1910-2010*, Singapore: ISEAS, 2012.

土佐林 慶太

早稲田大学大学院文学研究科
博士後期課程

本書は、著者が一九七六年にコーネル大学へ提出した博士論文をもとに、一九八三年にガジャマダ大学出版会から刊行された同名著作（ただし、初版の副題は *A Study of the Development of Muhammadiyah in a Central Javanese Town* である）の増補改訂版である。インドネシア最大の改革派イスラム団体であるムハマデイヤを分析対象として、著者の長年にわたる参与観察、聞き取り調査、公文書調査の成果が、その分析に活用されている。

本書は二部、一四章で構成されている。第一部は、ムハマデイヤが設立された一九一〇年代から一九七二年までを綴った

初版の内容に、最小限の修正を加えたものが、再録されている。一九七〇年代初めに、著者が約一年半にわたりフィールド調査を行った、コタグデ（中部ジャワ、ジョグジャカルタ市内の町名）における、ムハマデイヤ運動の発展に力点を置き、いわゆるイスラム改革主義運動が同地の人々の生活に浸透していく事例を提示する。

第二部は、著者の最新の研究による書き下ろしである。初版で著者が提示した仮説の再確認を出発点として、その後（一九七二―二〇一〇年）、インドネシア社会で起きた急速な変化と人々の価値観の多様化により、ムハマデイヤ運動が現在進行形で直面している問題について、「イデオロギー的」、「社会的」、「経済的」側面から考察がなされる。最後にこうした分析を通して、著者は、ムハマデイヤの未来についても言及している。

本書が出版された二〇一二年には、インドネシア各地の大学で、著者を招いた出版記念セミナーが開催されるなど、現地での本書に対する関心は非常に高いものとなっている。本書は、ムハマデイヤ設立期から現在までの約一〇〇年を、通史的かつテーマ横断的に考察した、インドネシアのイスラム研究に関する第一級の研究書である。同時に、四〇年以上にわたって同地を訪れ、その変化を見続けてきた著者による、インドネシアの社会変容を扱う研究としても非常に価値が高く、近現代インドネシア史を学ぶ者にとって、必読の書と言えるだろう。



Yücel Hacıoğlu, *Atsız'ın Mektupları*, 2. basım, İstanbul: Ötügen, 2013. (エジエル・ハジアルオール『アトスズ書簡集』第二版、イスタンブール、二〇一三年)

小野 亮介

慶應大学大学院文学研究科
後期博士課程

ヒュセイン・ニハール・アトスズ（一九〇五―七五）はトルコ共和国を代表するナショナリストとして記憶され、トルコ人の血統の偉大さを説く彼の人種主義的民族主義は今なお多くの人々を惹きつけている。『灰色の狼の死』、『魂の人間』などの著書は版を重ね続けているが、この種の思想研究・個人研究では書簡もまた重要な手掛かりとなりうる。

本書は編者自身を含む三〇余名にアトスズが宛てた書簡を収めている。一九四三年から亡くなる一週間前までの書簡約二八〇点のうち、八割近くが一九七〇年以降のもので、「書簡によるクーデター」（一九七一年）以降のトルコの政治的・社会的雰囲気が生々しく描写される。また彼が主宰していた『オテュケン』誌やトルコ史に関する

様々なテーマも語られている。

第二版では新たに約六〇点が加えられたがその大半は、当時ミュンヘンのラジオ・リパティに勤務していた新疆出身のカザフ人、ハサン・オラルタイ宛のものである（その存在を評者は人づてに編者に伝えた）。アトスズはトルコの状況をオラルタイに語るが、とりわけ一九七二年にイノニユが共和人民党総裁辞任に追い込まれたことや、後継のエジエヴィトによる党の「中道左派」化を露骨に批判している点は興味深い。イノニユに対する罵倒は、一九四四―四五五年の「人種主義・トゥラン主義裁判事件」によるアトスズの怨恨の深さを物語っている。

昨年夏アンカラに編者を訪ねた際、彼は「出版を通じて、歴史的価値のある資料の散逸を防ぐことが出来る」と評者に語ってくれた。彼にとって第二版はまだ不十分であり、既に第三版刊行の意欲があるという。編者はプロの研究者ではなく、注がやや簡潔すぎる点は気になるが、彼のような熱意ある人々もトルコ史研究を担う一翼であることを忘れてはならないだろう。



Ferman Bayır (ed.), *Gezi Direnişi: En Özel Fotoğraflarla*, İstanbul: Kaynak, 2013. (フェルマン・バユル

編『ゲズイ・レジスタンス…最も特別な写真』、イスタンブル、二〇一三年)

小野 亮介

慶応大学大学院文学研究科
後期博士課程

イスタンブル・タクシム広場に接するゲズイ公園の樹木伐採に端を発した市民の抗議は、二〇一三年五月二七日に始まった時点では取るに足らないものだった。しかし放水や催涙ガスによって抑え込もうとする警察の様子が入ターネットを通じて拡散されると、デモ（彼ら自身はしばしば「革命」と呼んだ）は急速に拡大し、アンカラやイズミルなど他都市にも波及した。世界中が注目したデモ参加者と警察との対峙は六月中旬まで続いた。やがてデモは沈静化した。以後も散発的に発生した。

デモとは一体何だったのか。彼らは何に怒り、何を訴えたのか。こうした問いに対し、写真は活字よりも雄弁である。本書は一〇のテーマ・警察、デモ行進、風刺、自然への愛、スプレー落書き、テレビメディアへの不信、参加者たち、支援者たち、お祭り気分、そして犠牲者をデモ側の立場から捉えた一五九枚の写真を収めている。その中でもとくに印象的だったものをいくつかを紹介しよう。

まず目につくのは、デモ参加者の中心が青年層であり、一〇代後半の参加者も少なくないことである。その多くが一九八〇年クーデタ以前のトルコの閉塞的社会状況を

直接経験しないまま育ち、現政権に不満を抱いている世代ともいえる。デモには世俗主義者か否か、社会主義者か民族主義者かを問わず、様々な人々が参加した。彼らの主張もまちまちだが、なかには政府の対米追従の姿勢を批判するフレーズも見られる。前年に『タイム』誌の表紙を飾ったエルドアン首相の写真は、コラーージュによってヒトラーに擬せられた。エーゲ海のスキューバダイバーたちは海中で、催涙ガスはここでは効かないぞという皮肉の効いたメッセージを掲げている。

評者としては、強力なデモ指導体制の欠如を、デモが終息に向かった要因の一つに挙げたい。しかし、こうしたデモ参加者の多様性やそれに応じた様々な批判、そして彼らが共有した憤りこそ、トルコの今を象徴するものではないだろうか。